I

ラムージョ「マルコ・ポーロの書序文」

図１　ジョヴァンニ・バッティスタ・ラムージョ

0　はじめに

「帰り着いてみると、二十年ぶりにトロイアから故郷イタカに戻ったときユリシーズの身に起こったのと同じことが彼らの身にもふりかかった。……三人ともすっかり姿が変わり、ヴェネツィア言葉をほとんど忘れてしまっていたこともあって､風貌や言葉づかいに一種何ともいえぬタルタル的なところを漂わせていた。その服装はみすぼらしく、タルタル風に厚手の布で作られていた。彼らは、当市のサン・ジョヴァン・クリソストモ区にある自分たちの家に向かった。……そこには親戚の者が何人か住み付いており……三人の顔付きがあまりにも変わり身な

りもひどかったものだから、それが何年も何年も前に死んだとばかり思われていたポーロ家の者たちだとは彼らにはどうしても信じられなかった。」[1*)]

とこれは、ユール版その他に掲載されているこの場面の美しい挿し絵（図 2）と共に、マルコの伝記や読み物にはかならず引かれる、二十数年ぶりにポーロ家の三人が故郷ヴェネツィアに帰ってきたときの、すっかりお馴染みになった光景であるが、それがラムージォの「マルコ・ポーロの書序文」に語られているものであること、かといってそのまま信用できるものではないこと、などは今ではよく承知されている。

Messer Marco Polo, with Messer Nicolo and Messer Maffeo, returned from xxvi years' sojourn in the Orient, is denied entrance to the Ca' Polo. (See *Int.* p. 4.)

図 2　ポーロの帰還（Yule, I, 口絵）

例えば上に引いた箇所では、1295 年彼らがヴェネツィアに帰還したときにはポーロの家はまだサン・ジョヴァンニ・クリソストモにはなく、後に有名になる同区の「カ・ポーロ」Ca‘ Polo (ポーロの館、図 I-3)は、帰国後に購入されたものであることが、前世紀来の古文書の調査・研究によってほぼ証拠付けられている[2)]。あるいはまた彼らの帰還も、同市に残っていた叔父老マルコが 1280 年の遺言状で遺産受託人にニコロとマッテオを指名しているようなところから、ここに描かれているほど思いがけないものではなく、不在中ずっと、あるいは少なくともベルシャかトレビゾンダ到着以後は、東方各地に散らばるヴェネツィア商人や商館を通じて、なんらかの形でその消息や情報が伝わっていたであろうと推測されている[3)]。したがってむしろ、‘ヴェネツィアの家では老マルコとニコロの二度目の妻とその家族たちが三人の到着を今や遅しと待ち構えていた、あるいはそろってサン・マルコ広場かリアルトの船着き場に出迎えていた’とでも想像したほうがより事実に近いことになる。[4)]

図 3　コルテ・デル・ミリオーネ（ポーロの館のあった中庭、現在の建物は後世のもの）

このように、そこに述べられている個々の事実や話の細部は今ではほとんど誤りあるいは根拠のない想像であることが確認されているが、それでもラムージォのこの「序文」が、“古今最大の旅行家"と称されるマルコ・ポーロの旅や生涯を生き生きとドラマチックに語る“物語"として、その伝記や一般的紹介のなかで必ずといっていいほど利用されるばかりか、まず第一に、二百年以上経っているとはいえ比較的近い生の声を伝えると同時に、ある程度古記録にのっとった最初のそしてほとんど唯一の本格的な伝記として、次に、ユーラシア大陸の歴史や大航海時代の地理的知見の拡大の成果をふまえた最初の近代的・実証的な注釈・解説として、いずれも古典的権威と価値を今なお保っていることには変わりない。しかも、大著『航海記旅行記集成』に収められたそのテキストは、単にそれ以前の一写本を覆刻したものではなく、後に「序文」に見るごとく、数種の手稿本を批判的に対校した集綴本の最初の試みであるのみならず、他系統のテキストに見られぬユニークで貴重な箇所を数多く含み、内容的にはオリジナルに最も近いものの一つとみなされ、後のテキストクリティークと祖本復元の試みに大きく貢献するというふうに、あらゆる点でマルコ・ポーロ研究の出発点となっている。[5)]

現に、今なお次々と世に送り出されるこの旅人の一般的伝記や紹介は例外なくラムージォにのっとっているし、またかのユールの大著を始めとして専門的研究書や注釈書の大半もまずこの「序文」の検討と批判から出発しており、テキスト校訂の点でも、マースデン、 コムロフらの近代語訳がこれを底本として用いているほか、現存するほとんどすべての諸写本間の系譜関係を文献学的・言語学的に確立することでテキスト研究の基盤を据えたベネデットの浩瀚で詳細精緻を極める研究が、ラムージォ版にのみ見える箇所の考察から出発し、それがアンブロジァーナ写本（Z^1)を通じてセラダ稿本（Z）の発見とムール=ペリオの集綴本につながっていったことは知られるとおりである。[7)]

この「序文」とその内容は、わが国でもユール、ポーチェ、ムール=ペリオその他の版や研究を通して、あるいは一般歴史書のなかでもすでによく紹介されており、このノートは同「序文」の、従来ほとんど紹介されることのなかった直接マルコ・ポーロの伝記に係わらぬ部分をも合わせて全訳を試みるとともに、そこに見られる個々の諸点につき、その後新たに発見された資料や近年の研究で明らかにされた事実やその周辺のことどもを紹介・考察し、もってして筆者自身にとっ

ての今後のマルコ・ポーロ研究の足掛かりとせんとするものでもある。一方また、前述のごとき周縁部分をも合わせ見ることによって、近代のマルコ・ポーロ研究がどのような時代的背景と関心のもとに始まったか、あるいは早くもどのように位置付けられているか、その一端をうかがうことが出来るのではあるまいかと思われる。

とまれその前に、著者ラムージォとその書『航海記旅行記集成』(以下『航海と旅行』) について簡単に触れておく必要があろう。

【註(I-0)】(＊印は今回新たに加えたもの。)

1) * 3「序文 (1)」(p. 29)。

2) 註 3-30 参照。

3) 註 3-32 参照。

4) さらに実際には三人だけではなく、旅行中にもうけた Giovannino と Stefano の二人の庶子 (その母 Maria も)、それに何人かの奴僕を伴っていたことが確実である(註 3-34, 47 参照)。

5) 註 3-42 参照。

6) Benedetto 1928。ラムージォ版に関しては特に第 6 章「F 以前の状態」pp. clv-cc (「最も優れた版の一つ」p. clix)。

7) Moule-Pelliot 1938。ただし、これに対してベネデットは、パーシヴァル・デーヴィッド卿によって発見された(1932 年)セラダ稿本 (Z) を出版した(1938 年)ムールの仕事を歓迎しながらも、彼自身が発見し(1928 年以前)用いたアンブロジァーナ写本 (セラダ稿本の写し、Z[1]) がそれと異なるところごく僅かであり、したがってマルコのテキストに本質的な修正を加えるものではないことを指摘し、またその英語集綴訳について、その労を多としながらも、それがフランク-イタリア語写本 (F) の基礎のうえに、現存するその他主要な写本 (Z・R ほか計 17) にみられる異文を、それがマルコのオリジナルなものかどうかを批判的に吟味することなく、客観的態度と称してすべて収録しているため、読むに耐えない「ごた混ぜの肉団子」polpettone (p. 639) となってしまい、復元すべきマルコの原文から、したがってその思想からかえって遠ざかるものであることを、例によって歯に衣着せぬ厳しい調子で批判している (Benedetto[4] 1939; Benedetto[5] 1939)。* (しかし、異語・異文の出展が明示されていないベネデットのテキスト(参考文献 II-5)よりも、それが明記されているムール／ペリオのテキスト(II-7)のほうが、今となってはより参考になる。

【参考文献】(末尾［　］内略号)

I　ラムージョ

1) Giovanni Battista Ramusio, *Navigazioni e Viaggi*, 6 vols, a cura di Marica Milanesi, Torino Einaudi, 1978-88. [Milanesi]

2) Antonio Del Piero, 'Della vita e degli studi di Gio. Battista Ramusio', ≪*Nuovo Archivio Veneto*≫, N. S., vol. IV, 1902, pp. 5-112. [Del Pielo]

3) Donald F. Lach, *Asia in the Making of Europe*, The University of Chicago Press, 1965, vol.1, pp. 204-9. [Lach]

4) Marica Milanesi, 'Introduzione' in [I-1], vol. 1, pp. xi-xxxvi.

5) George B. Parks, 'Ramusio's literary history', ≪*Studies in Philology*≫, vo1. 52, 1955, pp. 127-148. [Parks]

6) George B. Parks,`The contents and sources of Ramusio's Navigationi', ≪*Bulletine of the New York Public Library*≫ vol. 59, June 1955, pp. 279-313. [Parks[1]]

7) E. A. Cicogna, *Delle Iscrizioni Veneziane*, II, Venezia, 1827, pp. 310-37.

その他、未見だが Milanesi に次のような文献が紹介されている(pp. xxxvii-ix)。

8) Giovanni Battista Ramusio, *Navigazioni e Viaggi*, 3 vols, Amsterdam, 1970-71. (他にラムージョのテキストとして、1954 年生誕七百年記念にヴェネツィア市当局から覆刻出版されたと記するものがあるが、Milanesi 他には挙げられていない。)

9) M. Bohme, *Die grossen Reisesammulungen des 16 Jhr. und ihre Bedeutung*, Amsterdam, 1962, pp. 73-95.

10) A. Carradori, *Sulla vita e sugli scritti di G. B. Ramusio*, Rimini, 1883.

11) S. Grande, *Notizie sulla vita e sulle opera di Giacomo Gastardi*, Torino, 1902.

12) S. Grande, `Le relazioni geografiche fra P. Bembo, G. Fracastoro, G. B. Ramusio, G. Gastaldi', ≪*Memorie della Societa Geografica Italiana*≫ XII, Roma, 1905, pp. 93-197.

II　マルコ・ポーロ：テキスト

1) Ranieri Allulli, *Il Milione*, Milano Mondadori, 1964 (1954). [Allulli]

2) Giovanni Battista Baldelli-Boni, *Il Milione di Marco Polo*, 2vols., Firenze Da'Torchi di Giuseppe Pagani, 1827. [Barddelli-Boni]

3) Adolfo Bartoli, *I Viaggi di Marco Polo*, Firenze Le Monnier, 1863. [Bartoli]

4) Luigi Foscolo Benedetto, *Il Milione*, Firenze Olschki, 1928. [Benedetto]（和訳は II-19)。

5) Luigi Foscolo Benedetto, *Il Libro di Messer Marco Polo Cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le Meraviglie del Mondo*, Milano-Roma, Treves-Treccani-Tumminelli, 1932. [Bnedetto[1]]（和訳は II-19）

6) Valeria Bertolucci Pizzorusso, *Milione*, Milano Adelphi, 1982 (1975). [Pizzorusso]

7) A. C. Moule & Paul Pelliot, *The Description of the World*, 2 vols, New York AMS press, 1976 (London 1938). [Moule]

8) Dante Olivieri, *Il Milione*, Bari Laterza, 1972. [Olivieri]

9) M. G. Pauthier, *Le Liure de Marco Polo*, 2 vols., Paris Librairie de Firmin Didot Freres, Fils et C.. 1865. [Pauthier]

10) Daniele Ponchiroli, *Il Libro di Marco Polo detto Milione*, Torino Einaudi, 1982 (1954). [Ponchiroli]

11) Giovanni Battista Ramusio, 'Dei viaggi di messer Marco Polo, gentiluomo veneziano', in [I-1], vol. III , pp. 8-297. [R]（和訳は II-19）

12) Aldo Ricci, *The travels of Marco Polo*, London G. Routledge,1931. [Ricci]

13) Gabriella Ronchi, *Milione le Divisament dou Monde*, Milano Mondadori,1982. [Ronchi]

14) Ruggiero Ruggieri, ・・・

15) La Société de Géographie,`Voyages de Marco Polo', in *Recueil de Voyages et de Méoires*, tome 1, Paris De l'Imprimerie d'Everat, 1824.

16) Henry Yule & Henri Cordier, The Book of Ser Marco Polo, 2 vo1s, Amsterdam Philo Press, 1975 (London, 1903-20). [Yule]

17) 岩村忍『マルコ・ポーロ研究』上巻、筑摩書房、1948。[岩村]

18) 愛宕松男訳注『東方見聞録』2 巻、東洋文庫、平凡社、1987 (1971)。[愛宕]

19) * マルコ・ポーロ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ『世界の記』－「東方見聞録」三版対校訳（高田英樹訳)、名古屋大学出版会、2013。[高田]

III　マルコ・ポーロ：モノグラフ

1) AA. VV., ≪L'Italia che scrive≫ XXXVII, N. 10, Numero speciale dedicato a Marco Polo, Roma, 1954, pp. 105-148.

2) AA. VV., *VII Centernario della Nascita di Marco Polo.* Istituto Veneto di Scienze. Lettere ed Arti, Venezia, 1955.

3) AA. VV., *Oriente poliano*, Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma, 1957.

4) AA. VV., *Venezia e l'Oriente*, a cura di Alvise Zorzt, Milano Electa, 1989 (1981).

5) Ranieri Allulli, *Marco Polo e il Libro delle Meraviglie*, Milano Mondadori, 1954. [Allulli[1]]

6) Roberto Almagia, 'Marco Polo', in [III-2], pp. 7-49.

7) Luigi Foscolo Benedetto, 'Di una pretesa redazione latina che Marco Polo avrebbe fatto del suo libro', ≪*Archivio Storico Italiano*≫, serie 7, vo1. XIII, fasc. 2, 1930, pp. 207-16. [Benedetto[2]]

8) Luigi Foscolo Benedetto, 'Perché fu chiamato "Milione" il libro di Marco Polo', ≪*Il Marzocco*≫, 14 settembre 1930, pp. 1-2. [Benedetto[3]]

9) Luigi Foscolo Benedetto, 'Marco Polo : The Desciption of the World. by A. C. Moule and Paul Pelliot', ≪*The Journal of the Royal Asiatic Society*≫, 1939, pp. 628-44. [Benedetto[4]]

10) Luigi Foscolo Benedetto, 'Nota marcopoliana a proposito de1 codice Ghisi', ≪*Atti della Reale Accademia d'Italia, rendiconti della Classe di Scienze morali e storiche*≫ vol. XVII, 1939, pp. 15-45. [Benedetto[5]]

11) Luigi Foscolo Benedetto, 'Non Rusticiano ma Rustichello', *Uomini e Tempi*, Milano-Nopoli Riccardo Ricciardi, 1953, pp. 63-70. [Benedetto[6]]

12) Luigi Foscolo Benedetto, 'Grandezza di Marco Polo', *ibid.*, pp. 71-84. [Benedetto[7]]

13) Franco Borlandi, 'Alle origini del libro di Marco Polo', *Studi in onore di Amintore Fanfani*, Milano, 1962, vol. I, pp. 105-47. [Borlandi]

14) Giorgio R. Cardona, 'Indice Ragionato', in [II-6], pp. 189-761. [Cardona]

15) Mario Casella, 'Il libro di Marco Polo', ≪*Archivio Storico Italiano*≫, serie 7, vo1. XI. 1929, pp. 193-230.

16) Rodolfo Gallo, 'Marco Polo, la sua famiglia e i1 suo libro', in [III-2], pp. 63-193. [Gallo]

17) Rodolfo Gallo, 'Nuovi documenti riguardanti Marco Polo e la sua famiglia', ≪*Atti dell'Istituto Veneto di Scienze, Lettere ed Arti*≫, tomo CXVI, 1957-58, pp. 309-25. [Gallo[1]]

18) Leonardo Olschki, *L'Asia di Marco Polo*, Firenze Sansoni, 1957. [Olschki]

19) Leonardo Olschki, 'Marco Polo, Dante Alighieri e la cosmografia medievale', in [III-2], pp. 45-66. [Olschki[1]]

20) Leonardo Olschki, '1954 : Venezia, 1'Europa e i Tartari', in [III-2], pp. 297-31. [Olschki[2]]

21) Giovanni Orlandini, 'Marco Polo e 1a sua famiglia', ≪*Archivio Veneto-Tridentino*≫, vol. IX, 1926, pp. 1-68. [Orlandini]

22) Aurelio Peretti, 'Per 1a storia del Testo di Marco Polo', ≪*Archivio Storico Italiano*≫ serie 7, vol. XIII, fasc. 2, 1930, pp. 217-47. [Peretti]

23) Cesare Segre, 'Introduzione', in [II-13], pp. xi-xxix. [Segre]

24) Sergio Solmi, 'Introduzione', in [II-10], pp. vii-xxi. [Solmi]

25) B. Terracini, `Ricerche ed appunti sulla più antica redazione del Milione', ≪*Rendiconti dell'Accademia dei Lincei*≫, serie VI, vol. IX, 1933, pp. 369-428. [Terracini]

26) R. Wittkower, `Marco Polo and the pictorial tradition of the marvels of the East', in [III-2], pp. 155-72. [Wittkower]

27) Alvise Zorzi, `Marco Polo e la Venezia del suo tempo', in [III-4], pp. 13-40. [Zorzi]

28) Alvise Zorzi, *Vita di Marco Polo veneiano*, Milano Rusconi, 1982. [Zorzi[1]]

29) 岩村忍『マルコ・ポーロ』、岩波新書、1975 (1951)。[岩村]

30) 佐口透『マルコ =ポーロ』、清水書院、1977。[佐口]

31) * 高田英樹『マルコ・ポーロポとルスティケッロ・ダ・ピーサ――物語「世界の記」を読む』近代文芸社、2016。[高田[1]]

32) * 高田英樹編訳『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会 2019。[高田[2]]

図４　ヴェネツィア市街図　①サン・ジョヴァンニ・クリソストモ教会　②リアルト橋

③サン・マルコ広場　（Touring Club Italiano, *Italia Settentrionale II*, pp. 230-1）

1 ジョヴァンニ・バッティスタ・ラムージョ

父パオロ Paolo は、1458 年故郷リミニからヴェネツィアに移住した一群の上層階級や知識人の一人[1)]。といっても、同市の君主マラテスタの迫害を蒙ったというわけではなく、ラムージョ家はリミニでも最も旧い裕福な名家の一つであり、君主とも親しかった[2)]。当時の気運にのってマラテスタも文芸復興奨励の姿勢をとっていたとはいえ、地方小都市国家リミニには経済的にも文化的にも知識人にとって活躍の場は少なく、彼らは当時なおイタリア最大の国際商業都市にして唯一の自由共和国ヴェネツィアでの生活に自分たちとその子孫の将来を託したのだった。それに、パオロにはヨーロッパ最古の大学パドヴァで法律と人文主義を学びたいという希望もあった。

建国以来交易と海運の国であるヴェネツィアは、当然ながら実務重視で文化に対しては伝統的に冷やかであり、教育といえば読み書き算盤、学問は少数のエリートの私的な営みとみなされ、国家はこれを保護奨励しようとはしなかったが、十六世紀ともなると東方貿易で得た富により、フィレンツェを始めとする都市国家の華やかなルネサンスの風潮を取り入れようとするに至った。そんな中で、法律を修めたパオロ・ラムージョも共和国官吏としての職を得、有能な法律家として成功するとともに、多数の上層人士の知己を得た。これは後に息子にとって、豊かで安定した経済的基盤と同時に、古典文化の教養と実り多い人間関係という大きな財産となって残る。

ジョヴァンニ・バッティスタ・ラムージョは、トレヴィーゾにて 1485 年 7 月 20 日、当時同地の刑事裁判所裁判官の職にあったパオロとヴェネツィア女性トミリス・マカッキオ Tomiris Macacchio の長男として生まれ[3)]、ヴェネツィアでもようやくその必要性が認識されだしたルネサンスの知的環境のなかで育った。パドヴァ大学では法律とギリシア・ラテンの古典を修めたが、どちらも学位は取らなかった模様。が、その大学やヴェネツィアのアカデミアで、後々まで生涯を通じて友情を結ぶことになる多くのユマニストたちと識り合う。1505 年二十歳の頃、臨時書記として総督府書記局に入る。当時文芸保護を標傍する都市国家は、フィレンツェとその書記マキァヴェッリの例に見られるごとく、優れた公式文書の作成や諸外国との交渉、自国の修史編纂のために競ってユマニストたちを求め

ており、ラムージョの場合も、その法律知識よりも古典の深い教養と、完璧といわれたフランス語ら外国語の能力が買われたものと考えられる。またラムージョにしてみれば、リミニ出身の移民ゆえ貴族ではなく、政治の世界での出世は望むべくもなかったこともあろう。

同年 10 月にははや、大使アルヴィーゼ・モチェニゴ Alvise Mocenigo の秘書兼通訳としてフランスに派遣され、ルイ十二世に謁見、その保護の下にフランス全土を視察した。1507 年同王が対ジェノヴァ軍を興した時にはその側にあり、親しく見聞したと伝えられる。同年交代した大使コンドゥルメル Condulmer に伴われて、5 月ヴェネツィアに帰る。この旅と経験が後のラムージョの教養と学問に大きな影響を及ぼしたであろうことは容易に想像される。この他、伝記研究者によってはスイスやローマそれにアフリカへの旅行が挙げられるが、記録は残っていない。

しかし、ラムージョの関心と才能は、政治ではなく別の所にあったようである。ポリグロットで、ギリシャ・ラテンの古典語はもちろんフランス語のほか、多くの訳に見られるごとくスペイン語・ポルトガル語に通じ、ヘブライ語も出来たといわれ、その興味と情熱 研究と著述は、ルネサンスのユマニストらしく古典学・考古学・地理・歴史それに医学・物理学・自然学・天文学と多岐にわたり、事実彼の仕事には、古典の教養に裏打ちされながら文学的・思弁的なものより、事実と観察に基づいた科学的・実証的なものの方が多い。

1515 年からは元老院書記官となり、諸外国・諸都市との様々な外交交渉に当たった。1524 年 12 月 4 日フランスチェスキーナ・ナヴァジェロ Franceschina Navagero と結婚、1532 年 7 月 4 日息子パオロ誕生、その教育には著名な友人を家庭教師に頼み、非常な情熱を注いだ。パオロも後に文人として名声を博し、父を継いで共和国書記官となる。1536 年に妻を、その二年後には母を失った。

その頃ラムージョに世界像・世界地理への関心をかきたて、後の旅行記集成の発端となったとみなされるのは、親交のあった人文主義者ナヴァジェロが 1524 年大使としてスペインに派遣され、そこから当時新大陸発見と東方貿易に沸くイベリア半島諸都市の様子や社会を詳細に描写・報告してラムージョに書き送ったことである。ナヴァジェロはスペインからインドや新大陸に関する多くの書物や資料を持ち帰って提供したが、一方ではラムージョの古代・中世の旅行記の集収

もこの頃には始まっていたものと見られる。

さらに大きな影響を与えたのは、ヴェネツィアやパドヴァの人文主義者たちとの親交であり、とりわけベンボ、フラカストロ、ナヴァジェロ、コンタリーニ、それにガスタディらで[4)]、彼らとの交遊は学問・研究・仕事ならびに私生活のあらゆる面にわたった。まとまった著書を残さなかったラムージョの思想と研究活動は、『航海記旅行記集成』に収められた若干の論文と解説以外に、彼らとの数多い書簡集に跡付けられる。なかんずく、当代最高の知識人と目されたベンボとは生涯にわたって厚い信頼関係にあり、互いに相手の思想と活動の最高の理解者であったとされる。例えば、ベンボが長として託されていた著名なベッサリオン文庫を収めるサン・マルコ図書館は[5)]、ヴァチカン秘書や枢機卿として多忙を極めるベンボに代って、実質的にはラムージョがその管理を任され、1543 年 12 月司書長にランベルティが就くまでその任にあった。この仕事がラムージョに多大の労力と時間を奪う一方、古今の豊かな典籍に触れる機会をあたえ、旅行記の編集に豊富な材料を提供したであろうことは疑い得ない。

もう一つ大きな刺激となったのは、アルド・マヌーツィオを代表とする出版印刷業者との協力であり[6)]、ヴェネツィアは古典や当代ユマニストの作品のみならず、海洋国家としての伝統から、あるいはまた当時に始まるその商業的・政治的衰退故に、地理や地図の研究・出版においてイタリアのみならずヨーロッパに優れて盛んだった。サヌート、ヴィスコンティ、フラ・マウロらの先達から、マリネッリ、フィオリーニ、ズルラ等の同時代人にいたるまで、数多の地図・航海図が「ヴェネツィアもの」の名で世に出回った。また、当時の新発見・航海報告・未知の大陸の驚異などを盛る読み物は、ストラボン、プリニウス、パウサニアウス、プトレマイオスらの古典と共に争って求められた。とりわけ喜望峰回りや西回り東方ルートの発見と開拓は、ヴェネツィアに強い危機感を覚えさせ、様々な研究と対策が講じられたが、そのため諸外国の資料や文献が取り寄せられ、その収集や分析、翻訳や編集の仕事が語学に堪能な博学の書記官に委ねられたとしても自然なことであった。年を追うにつれ、彼もまた新たなコスモグラフィー、地理上の発見や征服とそれに伴う世界の新たな認識に関心と仕事を集中させてゆく。それは最後に、大著『航海記旅行記集成』として実を結ぶこととなる。

もっとも、その集成に収録されている膨大な数の旅行記がいつからどのように

して集められたか、あるいはどのような版や訳が使われたかについては、最初は匿名で出版されたこともあって、いくつかを除いてよくわかっていない。近年の研究者デル・ピェーロとパークスは共に、彼の書簡を順を追って検討しその跡をたどっているが、結論はいささか異なる。詳細は省略するが、前者が、ラムージョは早くから旅行記もの出版の意図を持ち、それが 1525 年頃当時スペインにあったナヴァジェロとの交信で決定的となったのだが、その前からもまず古代・中世ものを集めてその訳を用意しており、次いでアフリカやエチォピアもの、さらに航海もの、そして最後に新大陸へと順次同時代の新発見に関するものが集められたとするのに対して、後者は、ラムージョはあくまで古典研究を専らとするユマニストであり、旅行記や地理は若い頃のラムージョにとって興味の一つではあっても中心的なものではなく、組織的に収集・出版する計画を持っていたわけでもなく、それに興味を示し収集を開始するのは 1534 年五十歳頃からであり、出版・印刷業者らに協力しているうちにフラカストロに勧められて、ようやく 1548 年頃出版の決意を固めたとする。またその材料集めも、古典と同時代ものは並行して進んでいたと見る[7)]。筆者にその当否を云々する資格はないが、後に見るごとく、これら「序文」からするかぎり地理には意外と暗く、自ら旅行することもなく、専門的な地理学者といわんよりは古典研究の人文主義者と考えるほうが当っているとの印象は否めない。

元老院書記官の職には 1553 年まであり、それ以前 1533 年からは（デル・ピェーロによれば 1550 年頃から）、十人委員会の書記も兼ね、死の年に至るまでその職にあった。いずれもヴェネツィア共和国の最高意志決定機関の機密を伺える立場にありながら生涯その分を越えず、生前から「忠誠この上ない」fidelissimo との辞を送られていた。また、その職務上いくらでも手に入れる機会のあった記録や資料を私的に利用することもなかったと言われる。一方ではしかし、シャルル八世のイタリア遠征（1494 年）そしてカンブレー同盟（1508 年）からカトー・カンブレジの和（1559 年）という、ヴェネツィアとイタリアの運命を決定したのみならず、その後のヨーロッパ史の転回点ともなった激動の時代に生き[8)]、当時なお一雄国たるヴェネツィアの政治・外交の現場に身を置いてつぶさに観察し、また数々の政治家や著名人と交渉がありながら、政治に対しては一貫して傍観者であった。実際、同じような地位にあってその危機の観察と考察から『君主論』

を書いたマキァヴェッリと違って、政治論は一切残していない。また、ヴェネツィアのユマニストらしく宗教的イデオロギーにとらわれることもなかった代わりに、当時もう一つの大きな問題であった宗教改革や魔女裁判等について論ずることもしていない。興味は別のところにあったようである。この辺が一方では、まとまった著書のないことと相まって、後世にあまり評価されず、研究されないことの理由となっていよう[9)]。晩年はパドヴァの自宅や別荘で過ごし、1557 年 7 月 10 日死亡、市のサンタ・マリーア・デッロルト教会に埋葬された。大議会議場にヴェロネーゼによる肖像画が、アリオストやヘンボのそれにまじって掲げられていたといわれるが、火事で焼失した（1577 年）。ラムージォを識る人はすべて、その温厚な人柄・深い教養・職務への精励・共和国への忠誠、そして類い稀な交際能力を讃えたという。[10)]

【註(I-1)】

1）父パオロ Paolo（1443-1506）にも,「永代借地法について」De iure emphiteutico,「陪審員の任務について」De officiis assessoris 等、いくつかの法律関係の論文や若干のラテン語の詩と翻訳がある。叔父ジェロラモ Gerolamo も最初パドウァで医者となり、次いでダマスクスにわたってギリシァ語やアラビア語を学び、アヴィケンナの翻訳などを残している。

2）マラテスタ Malatesta：13 世紀に始まるリミニの僭主。マラテスタ二世（?-1312, ダンテの「ヴェッルッキォの猛き親犬」地獄篇第 27 歌）の時に、ロマーニァ・マルケ地方一帯を征服。その子ジァンチォット Gianicotto（?-1304）の妻フランチェスカ Francesca と弟パオロの悲恋は、『神曲』地獄篇第 5 歌に詩われて名高い。パオロ・ラムージォの頃の君主シジスモンド・パンドルフォ Sigismondo Pandolfo（1417-68、図 2）は、ルネサンスの著名な傭兵隊長にして文芸保護者。レオン・バッテイスタ・アルベルティに設計させたマラテスタ教会（1447-1503、図 1）は、初期ルネサンスの代表的な建築物として今に残る。バンドルフォ五世（?-1534）の代にチェーザレ・ボルジァに侵略されたが（1499）、教皇アレクサンデル六世の死に伴うその失脚（1503）により、ヴェネツィアの支配下に移る。1528 年教皇クレメンス七世により教会領に併合されて終る。

3）1486 年ヴェネツィア生れ、とする説もある（Del Piero pp. 12-14）。他に, Tiberio, Eurnia, Livia, Cornelia, Faustina の五人の子があった。

4）ピェトロ・ベンボ Pietro Bembo（1470-1547、図 3･4･5）：ヴェネツィア生まれだが、大

使だった父の転勤に伴い各地の官廷に出入りする。まずフィレンツェに育ち、若くしてその文才を認められる。フェッラーラではルクレツィア・ボルジァの愛人（1498），ウルビーノの宮廷に遊び（1506-11)、時の教皇レオ十世に招かれてローマでその秘書（1512-19)、次いでパドヴァに棲み、1539 年枢機卿となる。その教養・博識・弁舌・文才等により当代最高の知識人と目され、 また家柄・体躯・威厳なども相まって各方面に大きな影響力を及ぼした。代表的な著述として、プラトニズムの愛の哲学の対話篇『アーゾロの人々』 *Asoloni*（1505）（仲谷満寿美訳『アーゾロの談論』ありな書房 2013)、古典語に対する俗語とりわけトスカナ語の優位を説いた『俗語散文論』*Prose della volgar lingua*（1525)、ペトラルカ風の『詩集』*Rime*（1530)、公式修史官としての『ヴェネツィア誌（1487-1513)』*Rerum venetarum* などがある。バンテオンにあるラッファエッロの墓碑銘の作者としても知られる：cf. エウジェニォ・ガレン（清水純一訳）『イタリアのヒューマニズム』創文社、昭和 35 年、pp. 126-34。

ジロラモ・フラカストロ Girolamo Fracastoro（1478-1553、図 6）:ヴェローナに生まれ，パドヴァ大学て医学を修める。学友にコペルニクスをもつ。詩論『ナウゲリウス』*Naugerius*、『事物の親和と反発について』*De sympathia et antipathia rerum*（これに対するラムージォの反論 'Dubbi sul libro del Fracastoro' も収録)、『病気の感染と伝染について』*De contagione et contagiosis morbis*（1546）等、医学・自然学・哲学・詩学などの分野に多数の著述がある。最も有名なのは『梅毒あるいはフランス病について』*Syphilis sive de morbo gallico*（1530）で，シャルル八世の侵攻と共にイタリアにもたらされたこの病気に罹った主人公の牧人＜シフィルス Syphilus＞の名は、後にその病名として全ヨーロッで用いられるに至る：cf. ガレン、前掲書、pp. 179-81, 205-6。

アンドレーア・ナヴァジェロ Andrea Navagero（1483-1529、図 7)：ヴェネツィア貴族の家に生まれ、サン・マルコ図書館司書を経て、共和国公式修史官となる（1516)。その後駐スペイン大使（1525）を勤め、カール五世との交渉にあたるが失敗し、ローマ掠奪を招くことになる。後に駐フランス大使としてカンブレーの和議に向かう途中ブロアで死亡。ユマニストとして、ラテン語や俗語でのいくつかの詩が残る。

ガスパロ・コンタリーニ Gasparo Contarini（1483-1542、図 8)：プロテスタンティズムに対するイタリア福音主義を代表する人物、内部からのカトリック改革と新教徒との融和を進めた穏健派の枢機卿。1536 年のパウロ三世の教会改革審議会の座長として活躍する。

ジァコモ・ガスタルディ Giacomo Gastaldi（ca.1500-60）：当時ヴェネツィアの最も著名なコスモグラファー。ラムージォも手伝ったといわれる総督宮盾の間の四葉の地図（図 9・12）の製

作者。『航海記旅行記集成』に収められている地図も彼の手になるとみられる：cf. Gallo, `La mappa dell'Asia della Sala dello Scudo in Palazzo Ducale e il Milione di Marco Polo, in (III-2), pp. 195-231.

5）ヨハンネス・ベッサリォン Johannes Bessarion（1403-72、図 10）:トレビゾンダ生まれのニカエア人主教。1439 年エウゲニウス四世主宰の東西両教会の統一のためのフィレンツエ公会議ではギリシァ正教側の理論的代表として活躍、同年枢機に任ぜられ、1449 年サビーナに移住。フィレンンェのアカデミアではギリシァ哲学とりわけプラトンを講じ、イタリア・ユマニズムに大きな刺激を与えた。1453 年の東ローマ帝国滅亡のときは対トルコ十字軍を唱える。1468 年ヴェツィアに寄贈されたギリァ古典の蔵書は、サンマルコ図書館創設の核となった。1472 年ラヴェンナ没。

6）アルド・マヌーツィオ Aldo Manuzio（ca.1450-1515、図 11）:プラトンを始めとするギリシァ・ラテンの吉典、ペトラルカ、ベッサリォン文庫、当代ユマニストの論文他を多数出版。文献学的考証を加えたテキストの選択、美しい活字と堅牢な製本、自主的な企画等で最初の近代的出版人とみなされる。俗にイタリック体と称される斜体活字の考案者（彼の名にちなんで＜アルディーノ aldino＞とも呼ばれる）、錨に海豚のかまったそのトレードマークは今も伝えられる。ユマニストとして古典に関する論文もあり、またエラスムスやラムージォも出入りしたアカデミア・ヴェネツィアーナの創立者でもある。

7）Cf. Del Piero p. 77 sgg..　Parks 1955 は、これに対する反論として書かれたもの。ミラネージとラックもパークスに近い見方を取っている：Milanesi pp.xviii-xxi, Lach pp. 204-5。ちなみにガッロは、1543. 8. 13 付ジュンティ社に対する十人委員会の出版許可を紹介している（Gallo pp. 138-9）。

8）カンブレー同盟：本土部に着々とその領土的野心を拡げるヴェネツィアに対して、ペルージァ・ボローニァに続いてファエンツァ・リミニ・ラヴェンナを奪回すべく、1508 年 12 月 10 日教皇ユリウス二世が呼び掛け、神聖ローマ呈帝マクミリアン、フランス王ルイ十二世，スペイン王フェルナンド、ハンガリー王の他、フィレンツェを始めとするイタリア諸都市国家がカンブレーで結んだ対ヴェネツィア大同盟。翌年アニァデッロの戦いでフランス軍に破れ、ヴェネツィアは国家存亡の危機に立たされるが、巧みな外交戦術で独立を守る。その後覇権確立を狙う列強、とりわけフランスと神聖ローマ帝国の確執の戦場となり、1559 年 4 月 3 日フランス・アンリ二世とスペイン・フェリペ二世の間のカトー・カンブレジの和で、十五世紀末シャルル八世よる侵攻以来のイタリア戦争に終止符が打たれ、フランスの勢力は後退し、ハプスブルグ王

朝スペインよるイタリア制覇が確立する。その間、諸都市国家は複雑な同盟と抗争を繰り返すが、最終的にはスペインの支配下組み込まれ、文化的にもスペインの異端審問の恐怖の下の陰欝な反宗教改革の空気に覆われ、沈滞し衰退してゆく。ヴェネツィアは、唯一の自由共和国として誇り高い独立を守るが、政治的には孤立し、一海洋商業都市としての存続を余儀なくされる：cf. Luigi Salvatorelli, *Sommario della storia d'Italia*, Torino Einaudi, 1974 (1938), pp. 287-327; Giuliano Procatti, *Storia degli italiani*, Roma-Bari Laterza, 1976 (1968), vol.1, pp. 111-70 （斎藤・豊下訳『イタリア人民の歴史』未来社, 1984, I, pp. 151-222)。

9)『航海記旅行記集成』には次の二編が含まれる：(1)「ナイル川の増水に関するメッセル・ジョ・バッテイスタ・ラムージョの論考」Discorso di messer Gio. Battista Ramusio sopra il crescere del fiume Nilo, Milanesi, vol. 2, pp. 387-428. (2)「香料が運ばれた当代までの様々な経路とこれからそれを運ぶに利用できる新たな経路に関するメッセル・ジョ・バッティスタ・ラムージョの論考」Discorso di messere Gio. Battista Ramusio sopra varii viaggi per li quali sono state condotte fino ai tempi nostri le spezierie e altri nuovi che se potriano usare per condurle, ed. Milanesi, vol. 2, pp. 957-90. デル・ピェーロに，これら以外にラムージョの手になると確認される著述が約 14 点挙げられている（Del Piero pp. 110-2）が、碑文や翻訳・解説など断片的なものばかりで、まとまったものはない。

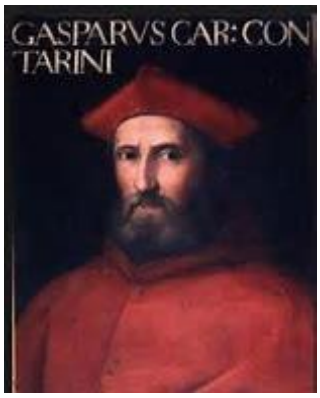
10）Gallo p. 138 に、同時代の年代記作者サンソヴィーノによるラムージョ評の紹介がみえる（Sansovino, *Venetia città nobilissima et singolare*, 1581)。

図 5　リミニ・マラテスタ教会

（正面レオン・バッティスタ・アルベルティ設計）

図 6 シジスモンド・パンドルフォ（同教会、ピエロ・デッラ・フランチェスカ画）

図 7･8･9　ピエトロ・ベンボ（ラファエッロ・クラナッハ・ティツィアーノ画）



図

10 ジロラモ･フラカストロ　図 11 アンドレーア･ナヴァジェロ　図 12 ガスパロ･コンタリーニ

図 13　ガスタルディ世界図（ヴェネツィア総督宮）

図 14 ベッサリォン

図 15 アルド・マヌーツィオ（左はそのトレードマーク）

図 16　ガスタルディ図アジア

①Cympagu＜ジパング＞ ②Zeiton／Zaiton＜ザイトン＞ ③Mangi Pro.＜マンジ地方＞ ④Manqui R.＜マンクィ地域＞ ⑤Niempo＜ニンポー＞ ⑥Canton＜カントン＞ ⑦Mantan＜？＞ ⑧China R.＜キーナ地域＞ ⑨Tartari Mogori＜タルタル・モンゴル＞ ⑩Cochin China＜コーチシナ＞ ⑪Campa R.＜チャンパ地域＞ ⑫Camboya＜カンボジア＞ ⑬Berma＜ビルマ＞ ⑭Caor R.＜？＞ ⑮Lago de Chiamay＜？湖＞ ⑯Regno de Bengala＜ベンガル王国＞ ⑰Gange Fiu.＜ガンジス川＞ ⑱Colfo de Bengala＜ベンガル湾＞ ⑲Syam R.＜シャム地域＞ ⑳Malaca＜マラッカ＞ ㉑Iava Menore＜小ジャワ＞ ㉒Iava Magiore＜大ジャワ＞ ㉓Sumatra＜スマトラ＞